

# 写真週刊誌 『ピクチャー・ポスト』に見る 第二次世界大戦のイギリス

—女性表象再考：制服の女性たちを中心に—

杉 村 使 乃

## はじめに：これまでの研究と本稿の位置づけ

本稿は、敬和学園大学「戦争とジェンダー表象」研究会における2009年度に行った筆者の研究報告をまとめたものである。これまで、この研究会では、第二次世界大戦下の主に雑誌を中心とした大衆メディアを取り上げ、そこにおける女性の戦争協力、またジェンダー・人種・民族の表象について調査・分析をすすめてきた。<sup>(1)</sup> 筆者は、これまでイギリスにおける第二次世界大戦時の女性の戦争参加・貢献について、また、同時期発行のイギリスの写真週刊誌、『ピクチャー・ポスト』(Picture Post: Hulton's National Weekly、以下PP)を使い、そこに見られる表象の分析を行ってきた。<sup>(2)</sup> 今回は、特に女性の戦争貢献に関する記事を用い、女性表象の傾向について、精査する。

表紙写真を用い試みたジェンダー表象については、以下のような傾向が見られた。

## PP表紙写真における女性領域・男性領域の区分

	女 性	男 性
キャリアの表象 (氏名・地位の記載)	芸能・娯楽部門 有名人の母・妻・娘	政治・軍事
表情、表象の傾向	笑顔・ファッション性・季節感・ 若い女性たち(「ガール」)	執務・任務中 父・保護者としての表象
人 数	単独	連帯(male bond)
活動場所	ホーム・フロント、銃後	ホーム・フロント、前線

PPの表紙写真においては、女優も含め、全般的に若い女性たち(girls)の表象が多数掲載されている点が特徴的である。彼女たちのほとんどは笑顔で、ファッション性や季節感を象徴している。これは、現在の多くの大衆紙にも共通することであるが、第二次世界大戦下に置いては、イギリス、そして連合国軍の戦争の大義としての「自由」・「解放」の象徴となったと考えられる。<sup>(3)</sup> 「母」としての表象はわずかに過ぎず、むしろ、イタリア

降伏、フランスの解放の場面などで連合軍の男性たちは、「父」、あるいは「保護者」として表象されていた。また、男性たちは、二人ないし、それ以上のグループで友情・協働を想起させるのに比べ、女性写真のほとんどは単独での撮影であった。

こうした傾向については、記事でも同じことが言えるのか。女性に関する記事は、いくつかの分野に分けられるが、今回は特に、制服を身につけて戦時労働に就いた女性たちの表象を取り上げ、その傾向についてさらに精査する。

## I. 制服の女性たちの表象

### 1. 戦争初期における女性たちの表情

イギリスでは来るべき第二次世界大戦に備え、1938年より、第一次世界大戦で試みられた女性による後方支援部隊の準備がすすめられた。1939年10月には、王室の主だった女性たちの制服姿が現れる（1939年10月7日、5.1 “Royal Ladies”）。女王は、聖ジョン救急部隊（St. John Ambulance Brigade）の他、10の部隊の制服が与えられている。王女エリザベス（The Princess Royal、後のエリザベス二世）は、主に陸軍の後方支援を担った国防軍女性後方支援部隊（Women’s Auxiliary Territorial Service 以下 ATS）の制服の他、この時点で5つの部隊の制服を与えられていたらしい。ケント侯爵夫人（The Duchess of Kent）は、ウェールズ聖ジョン団の最高司令官である（Lady Superintendent-in-Chief of the Order of St. John for Wales）。グロスター侯爵夫人（The Duchess of Gloucester）は、聖ジョン救急部隊（St. John Ambulance Brigade）のメンバーであり、また、聖ジョン十字団の名誉職（Dame Grand of Cross of the Order of St. John）を与えられている。王室の女性たちは、戦時奉仕・労働に携わる各団体の視察・慰問を積極的に行った。ポスターは、必要な労働力を集めるための手段であったが、女性の戦時労働への参加を促すポスター制作の場を視察するケント侯爵夫人の姿が見られる。このポスターは、救急医療、食料供給などの軍隊の後方支援、また民間防衛（civil defence）だけでなく、軍事工場（munitions）に勤務する多くの女性たちが必要となる事態に備え準備されていた（1940年3月16日、6.11）。

1939年10月7日（5.1）掲載の「ホーム・フロントにて」（On the Home Front）では、ATSが訓練中の軍隊に食事を提供するための調理の訓練を受けている。この頃の女性たちの表情はどのようなものだろうか。表紙写真の女性たちの表情のほとんどは第二次世界大戦期を通して、さわやかな笑顔である。記事においても、戦争の初期においても、やはりカメラは彼女たちの見せる笑顔を捉えている。1939年10月14日（5.2）の「笑い」（Laughter）という記事では、戦時労働に就く女性たちの笑顔

が集められている。ステージを見て大笑いしているのは空軍の後方支援部隊の女性たちである(図1)。娯楽として提供されたと思われるコンサートに、英空軍(Royal Air Force、以下RAF)の男性に付き添われて出席した。そしてキャプションには、「この陽気な笑いは、民間航空防衛隊(Civil Air Guard)の女性たちとは分かち合うことはできなかった」とある。この団体は、女性部隊の編成に動きがあった1938年9月に編制されたものである。緊急のアピールに際し、入隊した女性たちは訓練を重ねていたが、いざ開戦というときには彼女たちは空軍に雇用されなかった。戦争初期における、民と官の区別、仕事の分担における混乱が感じられる一説である。

同号の「笑い：トラブルに合ったトラック…」には、泥にタイヤをとられたトラックを救い出した後の訓練中のATSの頼もしい笑顔や、また、これから海軍の任務に就く恋人との別れを惜しんでいたのに、あくる日には、これまでやっていた店員の仕事を辞め、ランド・アーミーとして食料供給に貢献する決意を固めた女性の笑顔が掲載されている(図2、3)。彼女たちの笑顔は、戦時に際し、国民の不安を和らげ、また女性たちの戦時労働への参入を促す効果があったであろう。女性とそれまで無



図1 1939年10月14日(5.2)  
Laughter: Women of the R.A.F. Reserve Get One Good Laugh, Anyway



図2 1939年10月14日(5.2)  
And The Girls Who Got It Out



図3 1939年10月14日(5.2)  
左：He Goes Back to His Job... Good-bye kiss from a sailor leaving London  
右：She Starts In On Hers

縁であったかのように見える重労働の組み合わせが生み出すコントラスト、そして戦時故に、去っていく男性を惜しむだけでなく、女性は普段とは違う労働にも積極的に取り組むべきである、またそうした労働をできるところを見せよう、というメッセージがメディアを通して発信される点はアメリカの場合と共通しているであろう。<sup>(4)</sup> 図4では、巨大なタイヤと格闘している女性のけなげな姿が示されている。彼女は、特殊車両運送訓練隊（Mechanised Transport Training Corps、以下 MTC）に所属する M.T. ガールである。この団体は、1939年に通産省管轄のもと創設されたボランティア団体で、当初は家庭があり、フルタイムで働くのが難しい女性がパートタイムで運転の業務につける機会を提供していたが、連合軍の後方支援も担うことになる。1941年12月の「国家動員法」（The National Service Act）の成立に伴い、正式に活動を認められ、賃金も出るようになった。この頃には、16歳～18歳を対象にした任務に入る前の訓練を行う団体（Girl's Training Corps）も活動を開始していた。いわゆるバトル・オブ・ブリテン、また独軍によるブリッツ（Blitz）時にも大いに活躍し、表彰されたものもいる。<sup>(5)</sup> 彼女たちの労働について記事では「平時であれば、彼女に



図4 1939年10月28日(5.4)

On the Home Front: A Difficult Job for a London M.T. Girl

は夢にもやろうとは思わなかった」とあり、普段それらの機械とは無縁の女性が大きな乗り物や重機と格闘しながら操作・運転する姿は、コミカルなコントラストを作っている。まだ本国が戦場になっていない、いわゆる「まやかしの戦争」（Phony War）と呼ばれる時期の女性たちの表情には余裕があり、読者に安心感、頼もしさ、また笑いをもたらす。<sup>(6)</sup>

## 2. 「男性並」の勤務へ

ドイツ軍の電撃戦はヨーロッパの勢力図を塗り替え、1940年6月にはイギリス本国への空襲（Blitz）が始まる。戦闘を遠く眺めていた時期と異なり、制服の女性たちのまなざしにも変化が見えてくる。1940年2月17日(6.17)、「ブリテンの女性軍隊」（“Women's Army for Britain”）ではATSの成り立ちとその活動、そしてMTCを大きく取り上げている。ここで求められる資質として、「知識」（応急処置など）、規律、機敏さ、そして十分な準備（knowledge, discipline, smartness, preparedness）が挙げられている（図5）。男性から成る軍隊と同様に整然と行動する場面を伝える一方、





図5 1940年2月17日 (6.17)  
The Qualities of Britain's Women at War: Discipline



図6 1940年2月17日 (6.17)  
The Qualities of Britain's Women at War: Smartness The Last Glance in the Mirror

図6に見られるように、任務の前に鏡をちらりと見て、身だしなみをチェックする姿を一緒に掲載する点は、後にも触れるが戦時労働に就く女性の凛々しい姿に「女らしさ」を添える方法として特徴的である。

空襲の中、消防士たちの活躍が市民を勇気付けたが、彼らを影で支えたのが、消防後方支援隊 (Auxiliary Fire Service, 以下 AFS) の女性たちであった。1941年2月8日 (10.6)、「偉大な任務へ出発の前に」(Before the Great Drive Forward) には、男性職員と共に整然と任務を遂行する女性たちの姿が見られる。ロンドンの60の地区を管理する管制室の中で、火災の知らせが届くと AFS は速やかに消防士に連絡、彼らの出発のための作業が整然とおこなわれる。表紙写真には現れなかった女性と男性が協働する姿、また女性の執務中の真剣な表情が見られる (図7)。

これまで男性だけの職場に女性が進出することによって、受け入れる男性の組織側に戸惑いが見られた。空軍では、以前より軍隊内部の治安を保つため警察部門が設けられていた。しかしながら男性警官は、問題が起きたときに女性たちを取り締まることに当惑していた。そこで1942年には、女性たちを取り締まるための女性警官が選ばれ



図7 1941年2月8日 (10.6)  
Before the Great Drive Forward

た。空軍の女性後方支援部隊（Women's Auxiliary Air Force, 以下、WAAF）から選ばれた婦人警官は、軍法会議の雰囲気慣れてもらうため、裁判のロール・プレイなどの訓練を受けていた（“The RAF. Choose Some Girls to be Police Women” 1942年1月10日、14.2）。それでは、軍隊内で実際にどのような問題が起きていたのか。それについては記事には具体的には触れられていない。記事の中には「女性航空隊（airwomen）は、入らない方が良いと勧められるようなクラブやレストランがあった。そして訪れるべき家庭や、また与えられるべき助言があった」と述べられている。実際に、この女性警察支部は犯罪と犯人を扱うというよりも、風紀の維持、犯罪の抑止が主な任務だったらしい（Wadge 181）。また、空軍法の一部は、女性、WAAF 隊員、また辞令を受けていない士官（Non Commissioned Officer、NCO）に適用できない。こうした人員間のトラブルに対処するためにこの組織は立ち上げられた。

一方、この戦時において、一般の女性警察官も社会でようやく認知され増員が求められていた。1944年10月7日（25.2）の「もっと多くの女性警察官が必要か」（“Do We Need More Policewomen?”）という記事には、女性警察官の歩みについて触れられている。それによると、1914年にロンドン警視庁の要請で、女性国家評議会（National Council of Women）は女性ボランティアによるパトロールを開始した。バッジのみで、制服はなかった。また逮捕の権限は持たず、主に、繁華街のパトロールと特に女性に対して忠告することが任務であった。こうした状況は1939年まで続く。その後、内務省はこれを再編制し、逮捕権を持たせた。女性巡査の基本給は週に56シリング、年間80シリングの昇給がある。別途、制服と住居手当、戦時手当18シリング（巡査部長は90～100シリング、警部は104～145シリング）が支給される。当時、女性補助警察部隊（Women's Auxiliary Police Corps）には1,000人の女性警察官がいた。1944年にはすでに彼女たちの存在が社会で受け入れられつつあった一方、依然として採用に反対する多くの警察署長がいたが、内務省は更なる女性の登録を促したと記されている。ここでも新しく採用された警官の教育として、擬似裁判のロール・プレイ、また暴力的な犯人への対処の訓練などが行われていた。

1942年6月13日（15.11）掲載記事のリードには「この仕事はかつて、女性には不可能だと考えられていた。しかし今や彼女たちはこの仕事のエキスパートである。そして日々、男性たちを他の任務へと送り出している」とある。ここで「バルーン」と呼ばれているのは、低空からの敵機の空襲を防ぐために上げられる阻塞気球（barrage balloon）のことである。そしてこれらを補修する作業は早くからWAAFの女性たちに与えられていた（図8）。当時はそれ以上の任務を女性たちに担わせるとは考えられていなかったが、1941年1月中旬、空軍司令部は、WAAFにバルーン

を操作する作業を割り当てることを考え始めた。上記 PP の記事は、このことを報道したものである。この作業には、どんな天候であれ 24 時間人員を割り当てる必要があること、また肉体的な力を要することから、空軍司令部は、WAAF の肉体的能力・適性をどのように



図8 1944年4月1日 (23.1)

Lost Explorers In a Synthetic Jungle

「大きなバルーンと格闘しながら、ドレスメーカーのように補修をする」と表現されているWAAFの女性たち。

評価するか、女性用の住居、食事、制服をどのように確保するか、またまた殺傷能力のある武器の携帯はどのようにするか、あらゆる面から検討した。<sup>(7)</sup>

この女性には「不可能」と考えられていた現場に女性を迎えるに当たり、以下のような指導方法・準備が取られた。

「女性には、模型を使って指導すると理解が早いことがわかった。ミニチュア模型は特に女性たちの記憶力に訴えるものがある。それから、もちろんであるが、魅力的な環境に置くことによって、女性たちは最も能力を発揮できる。操作について学ぶ部屋は緑色に塗られた。また宿舎の外でガーデニングを楽しめるよう、用具も揃えられた。バルーン・ガールたちが重労働と孤独の伴うこの生活を楽しめるように、できる限りの配慮がなされた」(1942年6月13日、15.11 図9)。



図9 1942年6月13日 (15.11)

The WAAF Learn To Man the Balloons

バルーン操作の講義。女性が「興味の持てない事柄 (stodgy facts)」でも、ミニチュア模型を使いわかりやすく説明する。

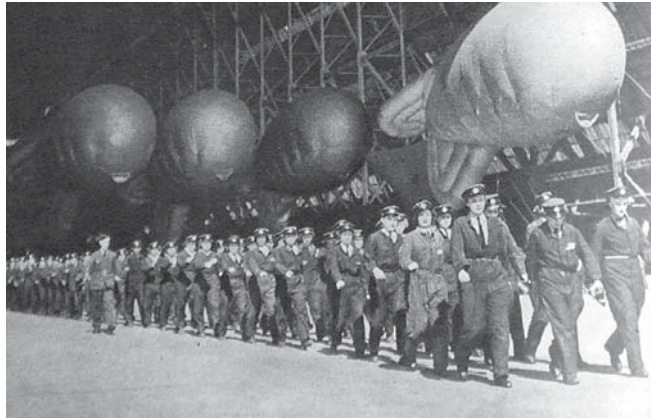


図10 1942年6月13日 (15.11)

The WAAF Learn To Man the Balloons

かつて「男性の仕事」と考えられていたこの任務に女性を登用するに当たり、「敏捷で、行動的、健康、快活、応用が利く、戸外の作業を好む」女性たちの中から志望者が集められた。

空軍本部の女性の知性に対する認識、家族を離れて任務に就かなければいけない女性たちへの配慮、そして殺風景なかまぼこ兵舎 (Nissen hut) に草花を植えることが、どれだけ WAAF の女性たちの心を慰めたかは定かではないが、多くのバルーン操作員 (balloon operator) が現場に配置されることになった。操作員たちは、前述したようにバルーンの補修に就いていたもの (balloon fabric worker) から、特に「敏捷で、行動的、健康、快活、応用が利く、戸外の仕事を好む」女性たちの中から志望者を募った (図 10)。RAF の男性操作員が自分たちのバルーンに女性の名前をつけていたことを真似て、女性操作員の中にも「ロミオ」などと名前をつけるものもあったらしい (Harris, 72-74)。

WAAF はその他にも 1940 年の終わりには、敵機の状況を座標に示す作業 (plotting) において信頼を得るようになっていたため、そこから Royal Observer Corps (以下 ROC) が再結成された。元々この部隊は、空軍の前線の任務につくには年齢が高すぎる男性たちの部隊であったが、ヨーロッパ本土への空襲と戦闘機の増加に伴い、おびただしい数の味方と敵の飛行機の状況を把握するための抜本的な改革が必要とされていた。ROC と RAF をより効果的に連携させるため、任務の内容が徹底的に精査され、これまで自主的に余暇のいくらかを国に捧げてきた 55 歳を越す男性は強制的に引退させられ、その代わりに初めて女性の入隊が認められた。男性たちの引退を伴う女性の入隊は周囲の反感を買い、リクルートに影響が出たこともあったらしい。しかしながら女性たちは、精神をすり減らすような状況にあっても沈着冷静に任務を遂行したため、やがて信頼を得ることになった (Harris, 68-69)。



1943年11月6日(21.6)掲載、「ブリテンがやっかいな空襲を受けている影に」(When Britain Has a Nuisance Raid) という記事には、ROCの女性たちの真剣な表情が表れる。この部隊は、他の後方支援部隊と違って、表立って行進や訓練を行ったり、市民の目の前で活動したりすることはない。しかし、空襲時に味方と敵の位置を確認し、作戦を練るなどの秘密の作業を行っている。ROCにおける女性の登用については、空襲という危機的な状況において、女性がヒステリー状態に置かれるのではないかと懸念されていたらしい(Harris, 65)。しかしながら、彼女たちはその働きによって、それらの懸念は的はずれであることを証明して見せた。また、ここでも沈着冷静に任務を遂行する女性たちの姿が讃えられている。

しかしながら、後の手記や聞き取りによると、無線で敵と味方の飛行機の状況をリアルに耳にすることも少なくなかったこの職場においては、耐え難い思いをすることもしばしばであったことが伺える。あるWAAFの一員は、海峡を渡る独機のパイロットの生々しい声、そしてその機を撃墜するRAFの飛行機スピットファイアの爆音を覚えている。

「彼[独機のパイロット]は飛行機から脱出できず、何度も何度も母を呼び、そして総統(the Fuehrer)を呪っていました。私は知らず知らずのうちに、『神様、どうか彼を脱出させて』と祈っていたのです。その祈りも空しく、彼は無線が届かない場所へと落ちていきました。私は気分が悪くなり、席を外しました。」(Harris, 66)

もちろん、味方の飛行機に関しても同様のことが起りうる。味方の飛行機に気づかれぬように近く敵機の無線を傍受する。「おお神様、どうか、どうか上にいる飛行機に気付いて…」という仲間の悲痛なつぶやきを耳にすることも少なくなかったという(Harris, 66)。しかし、戦時の報道において、こうした悲痛な思いは記されることはほとんどなかった。むしろ、多くの男性に代わって、新しい現場に就く女性たちの目を見張る活躍を知らせ、彼女たちの働きに対する信頼感を勝ち得るためにページは割かれている(図11)。

WAAFの女性たちは様々な業務に就いたが、飛



図11 1943年11月6日(21.6)  
When Britain Has a Nuisance Raid  
空襲時の敵機と砲撃目標を監視する  
ROC



図12 1944年9月16日 (24. 12)  
表紙 The Story of the A.T.A.



図13 1944年9月16日 (24. 12)  
The Work of Ferry Pilots

行機に乗ることはなかった。女性のパイロットが活躍できたのが、航空運輸援助隊 (Air Transport Auxiliary) である。工場から RAF の空港まで、年間1万台ほどの飛行機を運ぶ。666人のパイロットの内、150人は女性であった。1944年9月16日 (24.12)

掲載、「A.T.A. ストーリー」(The Story of the A.T.A.) には、ここでの任務とその一日について述べられている。この号の表紙は、任務を終えた後なのか、A.T.A. の若い女性パイロット一人がほっとした表情を見せている (図12) 一方、記事では、男性と女性が真剣な顔で協働する様子、またリラックスした表情で休憩時に同僚同士でカードゲームを楽しむ様子、またお互いに自分が担当した飛行機の個性について情報交換しあう様子などが掲載されている (図13)。



図14 1943年1月23日  
Darn and Mend Afternoon: A.T.S. Give Soldiers A Lesson : Tough Job for Tough Fingers  
入隊時、筋骨たくましい男性が、まさかATSのコックに教えを受けるとは夢にも思わなかった。

多くの場合、自分たちの任務について指導するのは男性たちである。男性の指導者の指示に熱心に聞き入る女性の写真は、ほとんどの団体の紹介において見られた。その中で、1943年1月23日「午後の縫い物：ATSが兵士にレッスン」(Darn and Mend Afternoon: A.T.S. Give Soldiers A Lesson)

は、男性に指導する女性たちの姿が表れる。新しく入隊した兵士たちがストーブの周りに集まり、ATSの隊員から靴下の繕い方を習っている。そのレッスンは、新しい「節約対策」の一環であり、また「良き夫になるための修行」と記されている（図14）。

ここでは、筋骨逞しい指先が不器用に小さな縫い物を操る様子がコミカルに描かれている。戦時労働で大きな乗り物や機械と、それまでそれらと無縁だった女性たちの間に生まれるコントラストについて前述したが、その逆の効果がこの裁縫をする男性たちの姿に表れている。しまいには、作業を投げ出してしまい、ATSの隊員に任せってしまう者もいる。ここでは、男性兵士に対する女性によるレッスンとその内容よりも、戦争という緊迫した状態の中に生まれた擬似家庭的な雰囲気という効果の重要性の方が大きいであろう。

拡大する前線、また連合軍における他国との協働、この状況を最も直接的に経験したのがATSであろう。陸軍の進むところどこでも、彼女たちの後方支援が求められた。そして前線を進むにつれて、避難民として保護されたものたちが入隊し、多様な国籍・民族を抱える軍隊となった。1944年8月5日（24.5）掲載、「砂漠を進みイタリアへと向かうガールたち」（Desert Girls Move on to Italy）という記事では、こうしたATSの状況を伝えている。

イタリア戦線を進む第8陸軍の後に続くのは、パレスチナ人と中東の避難民たちから成るATSのドライバーたちである…エキゾチックな名前がついているアラブの町や風物、それらを訳してみるならば、「薔薇の街」や「ガゼルの谷」と言う。ここは最早、第8陸軍に馴染みの土地ではない。イタリアの町は丘の上に築かれ、それぞれが聖人の名を冠している。イタリアの土埃にまみれ、連合軍は進む。そこには、2千年前パレスチナの地からヨーロッパへキリスト教をもたらした男たちと女たちの中にあつた何かと共通するものがある。…ローマから、カギ十字を追い払った陸軍についてきたのは、パレスチナとキプロス島からやってきたATSの志願兵である。――ユダヤ人、アラブ人、そしてフランス人、その他半ダースの国々からの避難民の姿が見られる。護衛団と共に彼女たちは進んでいく。

中東に対するヨーロッパ側のオリエンタリズム、そして征服者としての自分たちの優位性が感じられるリードである。図15では、朝5時にエンジンバラ出身の士官が、各地からの避難民で構成された部下たちに対し、その日の任務について確認を行っている。そこには、英語、ヘブライ語、フランス語、チェコ語が飛び交う。隊員は皆、劣悪な住居環境を気にもせず、また行く先々で入隊してくる避難民たちは、ナチスの

恐怖から各地を解放するために戦うイギリスの制服を身につけることに誇りを持っている、と記されている。解放をもたらす連合国軍に対する避難民たちの「恩義」と、一緒に戦う「誇り」、そして打倒ナチスという共通の目的が確認される。一方、男性たちと共に厳しい環境の中を進軍する ATS であるが、休憩時間にお互いに鏡を見せあい身づくろいする姿の写真が、彼女たちの「女らしさ」を表すものとして一緒に掲載されている。



図15 1944年8月5日 (24.5)  
Desert Girls Move on to Italy  
多様な国籍・民族を抱えるATS

## Ⅱ. 「市民」としての「少女」たち

多くの女性が「市民」として国家に貢献できることを示した戦時下は、少女たちにも「市民」として将来のヴィジョンを描き、行動することが求められた時代でもあった。ここからは、前述した制服の女性たちの「妹たち」の活動を扱った記事を取り上げる。



図16 1942年8月1日 (16.5)  
School Girls Train For Motherhood

ケンジントン高校の少女たちは、学問を身につける (to be scholars) と同時に、市民になること (to be citizens) を学んでいる。学業修了証書の後、1ヶ月の母親業について学ぶコースを履修させている。そしてそこでは、人形を使って、育児の練習をし、衣類の作り方について学ぶ。また地域の医療機関を訪問し、検診を受ける母親たちと話したり、実際に赤ん坊に入浴させたりするなどの実習を行う (図16)。



学校での時間のどれくらいが、ラテン語、代数、ギリシャ語、神話学に費やされるべきなのか。そしてどのくらいの時間が、将来必要になる家庭科や技術の修得に充てられるべきなのか。子どもたちに将来への備えをさせること、そして新しく姿を変えたこの世の中で、自分たちの役割を果たせるよう準備させることの重要性を、我々はより一層認識しつつある。

(1942年8月1日 16.5 “Schoolgirls Train for Motherhood”)

表紙の女性写真については、母性を感じさせるものは決して多くはない。しかしながら記事に目を向けてみると、夫の不在の間の母親たちのケア、また少子化傾向に対する懸念などが取り上げられている。戦時下で、女性の後方支援の必要性が高まっている一方、少女たちに対しては、次の世代を生み出す「母」としての役割が、「市民」としての役割の一つとして重要視されていることが伺われる。

多くの女性たちが各種後方支援団体に登録し、戦時労働を行ったことについては前述したが、少女たちもまたそうした団体、あるいは“pre-service”の下部組織に登録していたことが伺われる記事がある。「ランド・アーミー」は男性が不在の農地に入り、食料を供給した団体である。<sup>(8)</sup> 1943年5月29日(19.9)掲載の「ランド・ガール大会におけるスナップ・ショット」(“Snapshots at a Land Girls’ Rally”)には、各地域のランド・ガールズが集まる大会について記録されている。南東イングランドにある城(Arundel Castle, West Sussex)にて、この大会は開催され、周辺の農家も集まり、村祭りのような様相を呈している。このロケーションについて写真のキャプションには以下のように述べられている。

南東イングランド、アルンデル城という素晴らしい場所にランド・ガールズたちは集まった。この日は、ランド・アーミー大会だけでなく村祭りのようでもある。城内ではバンドが演奏し、軽食が供された。ランド・ガールズたちと訪れた人たちは、太陽の光の中、のんびりと城内を回る。木々に縁取られた丘に位置したこの城は、イギリス人の夢の城(your dream of an Englishman’s castle)である。

男性が去った後の農村で食糧供給のために奉仕するランド・ガールは、軍隊の後方支援部隊と違い、明るく健康的なイメージの写真が多い。ここではさらに、古き良きイングランド、イギリス人の守るべき「ホーム」を想起させる「イギリス人の夢の城」というイメージが重ねられている。PPは1940年以後、ヨーロッパ諸国におけるナチス独軍の電撃戦の爪痕を伝えるとともに、自国の美しさ、特にカントリーの美しさを強調する記事を頻繁



図17 1943年5月29日(19.9) Snapshots at a Land Girls' Rally  
 左：The Man With the Expert's Eye 右：The Girls He came to See  
 力強く、日焼けしたランド・ガールズの行進。かつては事務仕事などをして  
 いたが、今や雨風でも戸外で働く。

に掲載している。また若い女性たちがイギリスの守るべき自由を表象していると考えられることについては前述の通りである。このランド・ガールの表象は、この二つの役割を同時に担っていると言えるであろう。一方、整然と行進するランド・ガールに厳しい視線を注ぐ男性の写真がある。キャプションには、「専門家の目を持つ男性：彼は農業と農家について全てを知っている。そしてどのような労働者が農地に向くのかを知っている」とある。この配置は、Iで述べた軍隊の後方支援の女性たちの描かれ方と共通している。戦時という緊急時において、男性の指導者、あるいは読者のまなざしの下、女性たちが規律正しく行動し、労働者としての有能さを示す場面を捉えている(図17)。

女性ジュニア航空団(Women's Junior Air Corps、以下WJAC)は、1939年に設立された。メンバーはWAAFにリクルートされることから、WAAFの事前訓練機関("pre-service")と考えられる。当時、4歳から20歳の女子120名くらいが450もの団に所属し、余暇を使って、ボランティア活動、また週に4時間の訓練の中で社会奉仕、体育、応急手当などを行っていた。こうした少女向けの団体は19世紀後半からイギリスで発展した、少女たちを啓蒙し、良き「市民」へと教育することを目的としたガールズ・クラブの活動と共通している。<sup>(9)</sup> WJACの大会の様子を記録した1943年7月17日(20.3)掲載の「ガールズ・ラリー」("Girls' Rally")には、この団体の趣旨として、彼女たちの様々な訓練が目先の戦争の勝利に貢献するためだけでなく、「市民」としての訓練であることが強調されている。

良く晴れたマンチェスター、ベル・ビュー(Belle Vue, Manchester)に1,500人の少



図18 1943年7月17日(20.3) Girls' Rally 運動会に大興奮。自分の団を応援する。



図19 1943年7月17日(20.3) Girls' Rally 暑さのため、他のメンバー (officers) が上着を脱いでも、着衣を決して乱さない団長 (Unit-leader Richardson, from Manchester)

女たちが集まった。空軍准将 (Air Commodore) が挨拶に立ち、志望するものは喜んで WAAF に迎え入れられることが伝えられる。そして RAF のチャプレンの講話が続くことからわかるように空軍と深いつながりがある団体であることが伺われる。晴れた空の下、様々なスポーツ競技に参加し、賑やかに自分たちの団体の応援をする少女たちが、戦時下の社会で自分たちに期待される役割をどれくらい意識しているかはわからない。しかし、各団体の団結と忠誠心、スポーツによって培われる体力、行進、そして「着替え競争」に見られる規律、これらが I で見てきたように戦時労働の訓練として機能していることは確かであろう (図 18, 19 参照)。一方、戸外の中でスポーツや、競技後に回転木馬 (roundabout) を楽しむ彼女たちの無邪気さ・快活さ、また身づくろいをする彼女たちの「女らしさ」も同時に記録されている。

少女たちのボランティア活動については、他に 1943 年 7 月 17 日 (20.3) 掲載の「余暇に行う農業ボランティア」(Off-Duty in the Farming Camp) でも触れられている。ここでは、広々とした明るい戸外で農業ボランティア活動を行い、また楽しげに戸外で食事の準備をする若い女性の姿が見られる。イギリスに避難してきた他の国籍・民族の参加者も見られ、少女たちはこうした出会いを楽しんでいるようである。上記の WJAC の活動にも見られたように、少女たちにとって、こうした活動は娯楽と訓練の両方の機能を兼ね備えていた。

少女たちの活動は、「古き良きイギリス」の風景と重ねられて記録されている。多くの男性が去った後、このイギリスが守るべき風景は女性たちの手に委ねられているかのようだ。1944 年 6 月 24 日 (23.13) 掲載の「ミッドランド運河の船を進める女性たち」(Women



図20 1944年6月24日 (23.13)  
Women Man the Barges on the  
Midland Canal  
歴史で学士号を取り、教職をめ  
ざしていたこの女性は今やペテ  
ランのボートの操縦士である。



図21 1944年6月24日 (23.13)  
Women Man the Barges on the Midland Canal In  
Britain Life Goes On: The Girls Who've Reinforced the  
Regular "Boaters" Do a Trip of 134 Miles: 女性が守  
る運河の風景

Man the Barges on the Midland Canal) は、「男性たちが去り、第二戦線で戦う間、女性たちはより多くの重労働をホーム・フロントで担っている」と始まり、カーブの多いこの運河を走る船を操る女性たちについて述べられている。作業は重労働であるにも係らず、田園が続く 134 マイルの運河を走る船というイギリスの風景は、男性が不在であっても、女性によって維持されていることをこの記事は讃えている (図 20、21)。

少女たちの活動の中でも特に、ヨーロッパの難民の問題を自分たちが解決すべき問題として捉えていたのが「ガイダー」(Guider) たちである。イギリスでは、第一次世界大戦前から、ボーイ・スカウト運動と共に、その少女版と言えるガール・ガイド運動が発展していた。<sup>(10)</sup> ガイダーたちは、その運動の中でも年上の指導者の立場である。1944年10月14日 (25.3) 「ガイダーたちは、ヨーロッパの飢えと病気と戦う準備をしている」(Guiders



図22 1944年10月14日 (25.3)  
Guiders Prepare to Fight Hunger and  
Disease in Europe  
ヨーロッパ解放を視野に入れて、救援活動の  
準備をするガイダー。

Prepare to Fight Hunger and Disease in Europe) に、彼女たちのヨーロッパ救援活動の準備について触れられている (図 22)。

ガイダーたちの年齢の幅は広く 20 代後半から 40 代くらいまでがこの活動に携わっていた。ガール・ガイド国際組織 (Guide International Service 以下 GIS) と連携し、週末などの余暇に活動を行う。この GIS の「ヨーロッパを救え」運動は、大会に集まったイギリス人ガイドが、占領されたヨーロッパから逃れてきた少女と出会ったこ



とから始まり、50万人のイギリス人ガイドの支持を得た。休戦条約が結ばれた暁には、ヨーロッパにおいて、衣食住、医療に関わる援助を速やかに開始するため、10万ポンドの募金を行う予定であるが、この時点ですでに3万ポンド集めている。そして400人のガイドたちは海外での活動を進めている。この国際ボランティア（GIS Volunteer）に携わるために幅広い年齢、そして教師、看護婦、医師、軍事工場労働者、ランド・アーミーなど様々な経験を持つ女性たちが余暇を使って訓練を受けている。そして、国際ボランティアでは、自分自身は質素な暮らしに耐え、建築作業、調理、様々な修理、保育、保健・医療に携われるような能力・適応力が求められる。現地のボランティア組織を管理すると同時に、現地の有力者の協力を得るために交流を行う外交官でもある。難民と現地の有力者と連携して活動する。こうした女性の姿は、「市民」として生きることを求められる少女たちの、ロール・モデルとなったであろう。

## まとめ

第二次世界大戦時のPPによる女性表象について、特に制服の女性たち、そして“pre-service”の少女たちの表象について、検討してきた。以前、行った表紙写真を用いた分析と比較し、以下のように整理できると考えられる。

表紙の写真においては、制服を身につけずすでに労働に携わっている“in-service”か“pre-service”かに関わらず、女性の写真は全般的にアップが多く、彼女たちの具体的な活動についてはわかりにくい。むしろ、彼女たちの明るい笑顔、快活さが強調されている。

一方、記事に関しては、表象はより複雑になっている。制服の女性に関しては、戦争初期においては、表情は笑顔が強調される。また慣れない仕事に取り組む女性の姿がコミカルに描かれる。1940年以降、より多くの男性を前線に送るため、より多くの女性の労働力が求められた。表情は執務中の真面目な顔がほとんどである。そして表紙には見られなかった男性と女性が協働する姿が表れる。しかしながら、各任務への導入、指導は男性によって行われる。各任務に対して、女性が規律を持って行動し、信頼しうる担い手であることが示される一方、身だしなみを気にする姿などを一緒に配置し、何らかの形で「女らしさ」を添えている。

“pre-service”の少女たちの表象については、彼女たちが「市民」として教育・訓練されるべきであると触れられている。しかしながら、「市民」の定義は各記事によって異なる。時には「母」となることであり、また時には具体的な任務を通して戦時に置かれた国家に奉仕することである。

各団体の活動の姿は概ね快活で、表情は笑顔が多い。また、団体行動の中で生まれる“sisterhood”も感じられる。彼女たちの戸外での活動は、「古き良きイングランド」を思

い出させる風景（田園、城、穏やかな川の流れ）と結びついて、イギリスの守るべき存在を象徴していると考えられる。少女たちの表象については、「市民」であることが強く意識されていると同時に、成人女性の多くが実務的な任務に配置され、無味乾燥とした場所で勤務しているのに対象的に、イギリスの田園風景と結び付けられている。イギリスの「伝統」の担い手がこうした少女たちに委ねられているのは、興味深い傾向である。

今後、さらに工場労働の女性、またホーム・フロントの女性たちの社会問題、制服を着ないガールたち、また他民族・国籍の女性たちなど、やはり PP に掲載された記事や写真を元に分析を進めていく。

## 註

- (1) 戦争とジェンダー表象研究会が取り組んできた課題については、以下の通り。「表象に見る第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」（2005～2007年度 科学研究費 基盤研究 B 課題番号 17310154 代表 加納実紀代）、「第二次世界大戦下のジェンダー・民族表象と「国民」の境界再編についての国際比較」（2008年度 敬和学園大学人文社会科学研究所補助金）、「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるジェンダー・民族表象の国際比較」（2009－2010年度 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究、研究代表者 加納実紀代）。
- (2) 筆者のこれまでの PP に関する報告については、引用文献記載の拙稿を参照。
- (3) 拙稿「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性像」参照。
- (4) 上述の研究会では、松崎洋子がアメリカの女性表象について報告している。『軍事主義とジェンダー』所収、「女の力をあなどるなかれ：アメリカ『レイディーズ・ホーム・ジャーナル』誌から」（pp.74-109）を参照。
- (5) MTC に関しては、D.Collett Wadge, *Women in Uniform* (pp.376-80) を参照。
- (6) Phony War 時の表象の傾向については、女性以外の写真についても、同様の傾向が見られる。拙稿「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』における「味方」と「敵」：英独の「空襲」の表象」参照。
- (7) WAAF の設立とその任務については、上述 Wadge と Carol Harris, *Women at War: In Uniform 1939-1945* も参照。
- (8) ランド・アーミーの活躍については、拙稿「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」参照。
- (9) 拙稿 2006年（平成18年）3月「イギリスにおける『ガール・ガイド』運動：20世紀初頭の“girl”をめぐる言説」参照。
- (10) Ibid.

## 引用文献

\* *Picture Post* (1938-1945) の資料収集、表紙写真撮影にあたり、中央大学西洋史研究室に多大なるご協力をいただきました。ここに感謝を申し上げます。

Harris, Carol. *Women at War: In Uniform 1939-1945*. Phoenix Mill: Sutton, 2003.

加納実紀代 他 『軍事主義とジェンダー』 インパクト出版会、2008年。

杉村使乃 「工場と戦場における女性：第二次世界大戦下のイギリスにおける女性の戦時奉仕」  
『敬和学園大学研究紀要』 第15号 2006年

—。「イギリスにおける『ガール・ガイド』運動：20世紀初頭の“girl”をめぐる言説」  
『新潟ジェンダー研究』 第6号 2006年。

—。「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』の表紙に見る第二次世界大戦下の女性像」  
『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』 第6号 2008年。

—。「写真週刊誌『ピクチャー・ポスト』における「味方」と「敵」：英独の「空襲」の表象」  
『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』 第7号 2009年。

Wadge, D. Collett. Ed. *Women in Uniform*. London: Imperial Museum, 2003.